

## 第 2 回・第 3 回会合 論点（案）

（第 2 回：別学・共学のあり方）

- ジェンダー平等が浸透し、高等教育進学率にも男女差がほとんどなくなった現代において、別学・共学それぞれのニーズや優位性、男女が多様な価値観に触れる環境で共に学ぶ意義をどう考えるか。
- 従来、岐阜市立女子短期大学を含めた女子大に典型的な教育分野（家政系、人文系など）が見られたのに対し、近年は、女子大に工学系や経営系のコースを開設する動きも見られ、一概に教育内容とジェンダーを関連付けることは適切とはいえなくなりつつあるが、このような現状にどう対応していくか。
- 公立の教育機関として、トランスジェンダーを含む LGBT など多様な学生の教育機会を保障する観点から、どのような大学のあり方が望ましいか。
- 岐阜市立女子短期大学は女子教育向上の理念のもと設立されたが、時代が推移する中、今後も同様の考え方が妥当しうるか。現代の社会にとって必要な質の高い教育研究を提供する使命を果たすという観点から、別学・共学のあり方はどうあるべきか。

(第3回：4年制ニーズへの対応)

- 卒業生が創造的で豊かな社会で活躍していくことができるよう、これからの社会に必要な能力の高度化・多様化にあわせ、多くの大学が、単に各分野の専門知識の教授だけではなく、起業家精神やグローバルマインドの育成、デジタル技術への対応等にも力を入れている。学生の選択は4年制が優勢となる中で、公立の高等教育機関としては学生のようなニーズに対応していくことが有意義か。
- 短大進学希望者は減少しているものの、学生の経済的事情や、就職への直結度の観点から一定のニーズがある。他方で、修学支援新制度によって経済状況にかかわらず学生が進路を選択しやすい環境が生じていることを踏まえ、公立短大の意義に変化はあるか。
- 岐阜県の地域特性として、国立総合大学である岐阜大学と、多様な分野で複数の私立大学がある中、公立の4年制大学は医療系の一部ニーズをカバーするにとどまる状況をどのように考えるか。
- 名古屋など近隣地域にも豊富な進学の実績がある岐阜市の環境において、公立の高等教育機関は、特に地域との関わりにおいてどのような役割が求められるか。地域貢献、研究機関・地域シンクタンクとしての機能や、地元への人材輩出の観点で、短大と4年制大学それぞれに特長はあるか。
- 短大という教育機関の多くが女子教育の歴史と密接な関係にあったことを前提に、別学を巡る前述のような状況変化を踏まえ、短大・4年制のあり方をどのように考えるか。